

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

クレオールのマリア： レユニオンの聖母信仰をめぐる考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 星子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002015

クレオールのマリア レユニオンの聖母信仰をめぐる考察

杉本 星子
京都文教大学人間学部

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1 はじめに | 4.2 「傘の聖母」 |
| 2 レユニオン概説 | 4.3 「サレットの聖母」 |
| 3 レユニオンのキリスト教史 | 4.4 「救済の聖母」 |
| 4 聖母マリアの巡礼地 | 5 路傍の聖母祠とサン・エクスペディ信仰 |
| 4.1 「黒い聖母」 | 6 クレオールの文化としての聖母信仰 |

1 はじめに

インド洋の西に、小さいが美しい火山島がある。フランスの海外県レユニオンである。この島には、聖母マリアに捧げられた教会がいくつもあり、聖母マリアの祭礼日には盛大なミサがおこなわれる。島の道をゆくと、あちこちに聖母マリアを祀る小さな祠が見られる。人々の聖母への信仰は篤く、こうした路傍の小さな祠に蠟燭や花が絶えることはない。

聖母マリア信仰は、12世紀後半のヨーロッパで大きな高まりをみせた。ゴシック大聖堂がヨーロッパ中で建造され始めたこの時代、聖母マリアは修道のための模範ではなく、神への仲介者、すなわち神にとりなしをしてくれる救済者として崇拝の対象となったといわれる（馬杉 1998: 108-109）。とくにフランスでは、シャルルマーニュ皇帝以来、歴代の王が聖母を篤く信仰した。1471年、ルイ11世は全国民に対して、日に3度、王国の平和を祈念するためにアヴェ・マリアの祈りを唱えるよう求めた。1573年に、教皇ピウス5世がロザリオのノートルダムの祝日を定めた。これによってフランスの聖母信仰は、さらに広まったといわれる。ルイ13世は、1635年に戦勝を祈願してフランス王国を聖母マリアに捧げ、1638年にはフランスのすべての町村で8月15日に聖母被昇天節の行列を行うことを定めた（竹下 1998: 72, 227）。フランスが、後年レユニオンと呼ばれるようになるインド洋の小島をブルボン島と名付けて、東南アジアやインドへ向かう船舶の補給基地としたのは、まさにこの時代、1642年のことである。

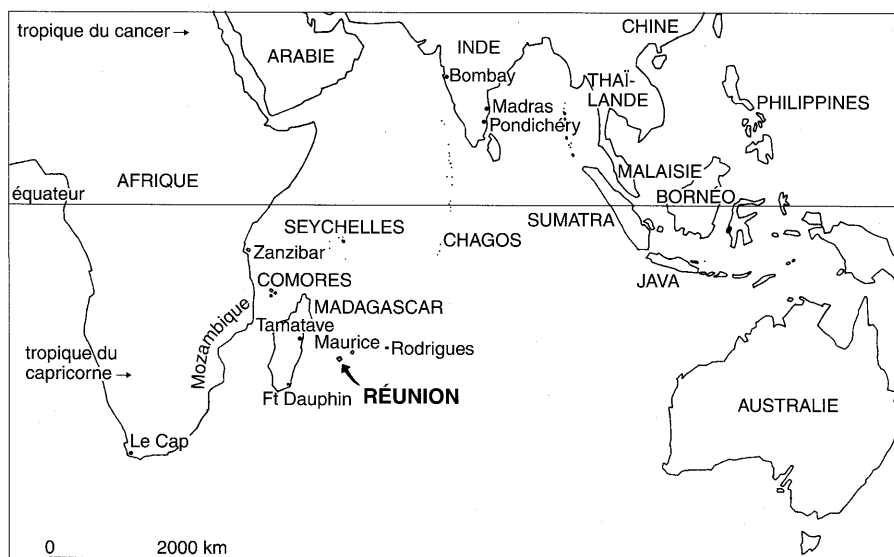
その頃、インド洋は海賊が跋扈する海域であった。1667年、モントゥヴェル公爵の率いる船団に追われた海賊船が、嵐の中、レユニオン沖で座礁した。海賊船の水夫たちは聖母に祈り、もしも命が助かったなら聖母にチャペルを奉納すると約束した。祈りは

聞き届けられ、水夫たちには一人の犠牲者もでなかった。1669年、現在のサント・マリー教会の近くに、座礁した海賊船の建材をつかって、レユニオン最初の聖母のチャペルが建立された (Barat ed. 1980: 125)。

こうしてヨーロッパの水夫たちによって島にもたらされた聖母マリア信仰は、やがて砂糖プランテーションの労働力として東アフリカやマダガスカルの港から船積みされモザンビーク海峡を越えた奴隷たちが過酷な労働のなかに救いを求めた聖母信仰を包み込み、さらに南インドの村の女神に祈りを捧げてインド洋を渡ったインド人契約労働者たちの聖母信仰と出会った。本稿では、こうしたレユニオン島の歴史のなかで育まれた聖母マリア信仰をクレオールという視点から捉え、グローバル化の進行のなかでプランテーション社会としてのクレオール社会から多文化共生社会への変貌をめざす今日のレユニオン社会における聖母信仰の意義について考察したい。

2 レユニオン概説

レユニオンは、マダガスカル島の東に点在するマスカレーニュ諸島の島々の一つである。南緯21.06度、東経55.36度に位置し、面積は2,507 平方キロメートルである (地図 1 参照)。標高3,069 メートルのピトン・デ・ネージュ山 (Piton des Neiges) と2,637メートルのピトン・ドゥ・ラ・フルネーズ (Piton de la Fournaise) という2つの火山を擁し、その景観は、生態的变化に富んでいる。気候は温暖で、モンスーンの影響により、5月から11月の乾期 (冬) と12月から4月の雨期 (夏) という2つの季節がある。

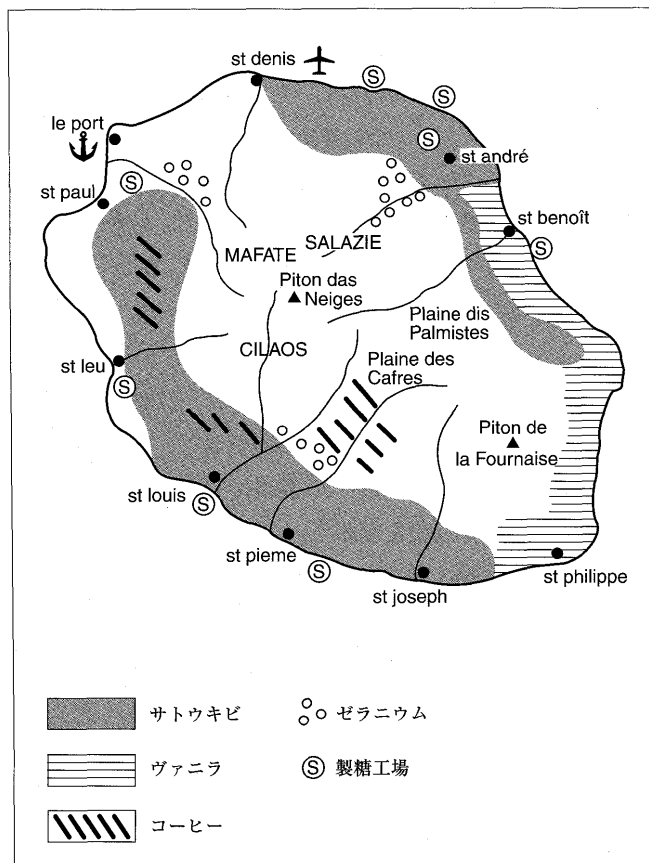


地図 1 インド洋西域島嶼地域

(Pruhomme 1984: 6)

島の人口は717,723人である（1999年7月現在）。レユニオンの主要産業は砂糖および砂糖精製商品の輸出で、他にコーヒー、バニラ、香料用のゼラニウムなどが生産されている（地図2参照）。近年は観光産業が発展し、住民の約3分の1がサービス業に従事するようになった。島民は、ヨーロッパ系クレオール（約35.5%）、アフリカ系クレオール（約22.0%）、マラバルまたはタムルとよばれるインド系住民（約16.5%）、シノワとよばれる中国系住民（約2%）から構成される（Dupon 1974: 67）。ただし民族構成に関する行政的な統計資料はなく、以上の数字はあくまでも推定である¹⁾。また島民の約88.6%がキリスト教徒であり、ほかにヒンドゥー教徒が約4.3%、ムスリムが約4.2%いる。キリスト教徒のうちローマン・カトリックが88.1%を占める。プロテスタントは4.3%、グレート・コミッション・クリスチャン8.0%、ペンテコスタ7.5%である（Barrett et al. 2001: 617）。

公用語はフランス語であるが、島民のほとんどは日常語としてクレオールを用いている。もともとクレオールという言葉は、スペイン語やポルトガル語のクリオーリョ



地図2 レユニオンの農作物

(Insee 1998: 13)

(criollo) を起源し、植民地生まれの白人を指すために用いられていた。やがてそれが植民地生まれの黒人や混血に転用され、さらに動植物や産物なども指すようになった。クレオールという言葉が植民地生まれのクレオール人が話す言語に対して用いられるようになったのは、19世紀のことである (三浦 2000: 88)。

クレオール語は、植民地社会の支配者と被支配者の間の「葛藤に満ちたミニマムの連帯」ともいえるべき共同作業の結果であるといわれる (三浦 2000: 92)。レユニオンのクレオール語はフランス系クレオール諸語の一つで、フランス語を基底語とし、東アフリカ諸語やマダガスカル語、タミル語などに起源をもつ言葉を数多く含む「混成言語」である。レユニオンの文化もまた、カトリックを国教としていた植民地時代のフランスの文化を基盤に、東アフリカやマダガスカル、南インドなどから来島した移民の諸文化が移植されて生まれた「混成文化」としてのクレオール文化である。

3 レユニオンのキリスト教史

フランスによるブルボン (レユニオン) 島の領有当初、島に聖職者はおらず、必要な宗教儀礼のほとんどは寄港する船団にのっていた宣教師に委ねられていた²⁾。1669年以降、何度か、ブルターニュのカプチノ会の神父たちが伝道のためにブルボン島を訪れたが、いずれも短期滞在であった。1712年、ローマの布教聖省はブルボン島をバリの大司教管区下の司教管区とし、聖ラザリスト修道会のフランス人神父4人によるミッシェンの創設を許可した。4人の神父は、2年後の1714年12月にレユニオン島に到着した。

1715年、フランス政府はブルボン島に入植者を送り込み、タバコ、綿花、砂糖、コーヒーのプランテーションがつくられた。レユニオンのプランテーション経営は、1720年代の世界的なコーヒー・ブームに乗じて軌道にのった。1735年から1746年にかけて、マエ・ドゥ・ラ・ブルドンネ (Mahé de Labourdonnais) が、フランス東インド会社マスカレーニュ総督をつとめた。彼はマスカレーニュ諸島にアフリカ、アジアからたくさんの奴隷を導入して、植民地経済の基盤を固めた。フランスは1685年に植民地における奴隷制プランテーションの運営規則、「黒人法典 (Le Code Noire)」を制定しており、ブルボン島にもそれが適用された。この法律に基づいて、輸入された黒人奴隷はカトリックへの改宗を強制された。18世紀には、ラザリスト会の修道士によって、セント・スザンヌ教会 (1729年建立)、サン・ベニヨワ教会 (1735年建立)、サン・ドゥニ大聖堂 (1743年建立)、サン・アンドゥレ教会 (1751年建立)、サント・マリー教会 (1754年建立)、サン・ルイス教会 (1756年建立)、サン・ピエール教会 (1765年建立) という今も残る7つの大きな教会が建設された。

その当時、イギリスとフランスは、インド洋の覇権をめぐる激しい争いを繰り広

げていた。1763年のパリ条約によって、インドには5つのフランス商館が残されるだけとなった（地図3参照）。1766年の王令によって、ブルボン島とフランス島（モーリシャス）の統治権は東インド会社からフランス政府に移行し、フランス王が任命した総督によって統治されることになった。1789年にフランス革命がおこり、翌年、島に植民地議会がつくられた。フランス革命以後、フランスからの聖職者の来島は絶えた。本国では奴隷制廃止運動が高まっていた。1810年、イギリスがマスカレーニュ諸島を占領した。1811年、サン・ルウで大きな奴隷暴動が起こった。1815年、イギリスとフランスが結んだパリ条約によって、ブルボン島はフランスに返還されたが、そのとき島に残る聖職者は5人の司祭のみであった。

1817年に、クリューニーの聖ヨセフ修道会の修道女と聖霊修道会の修道士が、布教のために来島した。彼らは島で最初の学校を創設し、奴隷解放に向けて活動を始めた。1848年、奴隷解放令が施行された。翌1849年、奴隷に代わる労働力としてインドで徴



地図3 インド人契約労働者の徴募地域と出港地

(Pruhomme 1984: 308)

募された契約労働者が到着した。契約労働者は南インドで徴募され、フランス領インドの港であるボンディシェリー、カリカル（カーライカル）、ヤナオンから出港した（地図3参照）。この年、プランターの娘で後に修道女となるエメー・ピニョール・ドゥ・フレズン（Aimée Pignolet de Fresnes）とフレデリック・ルヴァヴァソー（Frederic Levavasseur）神父が、リヴィエール・デ・ブリュイ（Riviere-des-Pluies）にフィュー・ドゥ・マリー（マリアの娘）修道会（La congrégation des filles de Marie）を設立し、解放奴隷や貧しい人々、障害ある人びとのための教育・福祉活動を始めた（*Quotidien* 22/03/1999）。1850年9月27日、法王ピウス9世は、ブルボン島を大司教管区とし、サン・ドゥニ司教区のデズプレ司教（Mgr Desprez）を初代司教とした。サン・ドゥニ司教区の専任司祭には、代々、ボルドー大司教の僧正補が任命される慣わしであった。こうして1850年から1917年まで、本国出身の7人の俗間聖職者が司教職を歴任した。

ブルボン島の製糖産業は1850年から1860年に黄金期をむかえた。砂糖プランテーションの契約労働者として導入されたインド人の人口は、1867年に、当時の総人口約21万人の3分の1以上を占めるに至った。しかしレユニオン島のキリスト教ミッションは、インド人契約労働者に対して積極的な布教活動をおこなうことはなかった。司祭たちは彼らの母語であるタミル語を知らなかったし、労働者たちは契約期間が終わるとともに帰国する一時的な滞在者にすぎないと考えられていたためである。一時、インドで活動をおこなっていたイエズス会の司祭が布教のために来島したが、インド人契約労働者のほとんどは島内各地のプランテーションに分散して居住しており、実際に布教活動を行うのは難しかった（Prudhomme 1984: 317）。また、フランス・イギリスの協定によって、インド人契約労働者には国籍の保持と信仰の自由が保証されていた。大きなプランテーションには、プランターの許可を得てヒンドゥー寺院がつくられ、祭礼がおこなわれていた。1870年代には裕福なインド商人たちが、大きな町にヒンドゥー寺院を建立した。カトリック教会は、そうしたヒンドゥー寺院とそこにおける宗教儀礼を異教的かつ野蛮なものとして激しく非難した（Callandre 1999: 432-435）。カトリック教会の力が強いクレオール社会にあって、ヒンドゥー教の信仰やインドの伝統的慣習を保持することは異端的な行為にほかならない。かくして異教徒であるインド移民は、島におけるプランテーション社会のヒエラルキーの底辺に組み込まれ、インド人の総称として用いられたマラバルという名称には、野蛮、不道德、さらには妖術師というイメージが付与された（Prudhomme 1984: 313-316）。

そのころフランス本国やインドの議会では、ブルボン島の砂糖プランテーションの劣悪な労働環境が問題となり、調査団が派遣された。その調査報告を受けて、1885年、イギリス・フランス間の契約労働協定は破棄され、フランス植民地へのインド人契約労働者の移送が停止された。この状況に対応するため、1887年に広東から中国人契約労働

働者が導入されたが労働者の徴募は難しく、プランテーションの労働力不足は解消されなかった。プランターは島に残るインド人労働者とその子供の定住を奨励し、彼らをできるかぎりプランテーションに拘束しようとした。1889年6月26日の法令で、レユニオン島生まれのインド移民の子供にフランス国籍が与えられることとなった。1890年代から20世紀初頭にかけて、インド移民第2世代のキリスト教への改宗が急速に進んだ。とはいえ、カトリック教会はすぐに教区教会をインド移民に開放したわけではなかった。その代わり、1898年、サン・ドゥニに最初のインド移民専用教会が建てられた (Prudhomme 1986: 258-259)。

1917年、レユニオン司教管区は聖霊修道会の管轄となり、翌1918年から島は再び「ミッション領」となった。以後1975年まで、司教は聖霊修道会から選出された。アルザス出身のドバムベルジュ (Daubemberger) 神父は、1920年代から1940年代にかけてセント・アンヌ教会 (1857年建立) をバロックスタイルへ改築することに精魂を傾けた。この独特の教会建築は、現在、レユニオンの観光名所の一つとなっている。

1946年におこなわれた住民投票の結果、レユニオンはフランス海外県としてフランス領にとどまることになった。同年、義務教育制度が導入され、公立学校がつくられた。これは島で初めてのミッション・スクール以外の教育機関である。フランス植民地統治下にカトリックが圧倒的な権力をもってきたレユニオンにも、次第にさまざまな宗教団体が活発な布教活動を行うようになった。すでに1931年にセブンス・デイ・アドヴェンディスト (Seventh-day Adventist) が島で布教活動を開始していた。1950年にはエホバの証人が、1960年にはアセンブリー・ドゥ・デュウ (Assemblées de Dieu), 1970年にはレユニオン福音教会 (Église Evangelique de la Réunion) が活動を始めた (Barrett et al. 2001: 617)。カトリック教会も、1952年に、中国人労働者を対象とする中国キリスト教ミッションを設立した (Prudhomme 1984: 325)。レユニオンのカトリック教会内部では、布教活動をめぐって大論争がなされ、1970年から71年には進歩主義の立場にたつ司祭たちが島から追放された (Barat ed. 1980: 30)。

1976年にローマ教会は、レユニオン島出身のジルベール・オブリー (Gilbert Aubry) 神父を司教に任命した。オブリー司教は、「喜びと希望、正義と平和」を標語に掲げ、教会の政党政治からの完全独立、還俗の自由、ポピュラー・クリスチャニズムと結びつくポピュラー・コミュニズム思想の否定、さまざまなキリスト教会派間の協調と他の宗教との友好関係、インド洋の他の島々や東アフリカへのカトリック連帯の拡大などを主張して、積極的な活動をおこなっている (Barat ed. 1980: 30)。

1999年3月21日、フィーユ・ドゥ・マリー (マリアの娘) 修道会は、創設150周年記念を祝った (*Quotidien* 22/03/1999; *JIR* 19/04/1999)。この150年のあいだに、修道会はレユニオンからモーリシャス、ロドリゲス、マダガスカル、セイシェルへと活動の場を

広げた³⁾。こうした長年にわたる教会や修道会の地道な活動をととして、人種や民族の違いをこえてレユニオンの人々のあいだにキリスト教が広く浸透していったのである。

4 聖母マリアの巡礼地

1950年にオブリー司教の祖父がブルミエ・フランセ (Premier Francais) の岩窟に祀って以来、土地の人々に信仰されていたルルドの聖母像が、1998年1月25日にサン・ポールの司祭館の庭に移された。同年2月1日、全島から千人あまりの信者が集まり、岩窟の聖母像のもとでミサが行われた。聖母像の足元にしつらえた祭壇の前に病人や障害者が座り、教区司祭は病める者たちが助け合うよう語った。外には露天が並び、聖母像や宗教画、ロザリオなどを売った。新聞は新しい巡礼地の誕生と報じた (*Quotidien* 12/02/1998)。5月10日には、四千人ほどのロザリオ会の信者たちが、このサン・ポールのルルドの岩窟聖母のもとに集い、レユニオンのロザリオ会結成35周年を祝った (*Quotidien* 11/05/1998)。

このようにレユニオンの人々のあいだには聖母への信仰が篤い。島の各地にみられる聖母の聖地のなかでも、とくに多くの巡礼者があつまること知られるサント・マリーの「黒い聖母 (la Vierge noire)」, サント・ローズの「傘の聖母 (la Vierge au parasol)」, サン・ルウの「サレットの聖母 (la Vierge de la Salette)」, そして首都サン・ドゥニの「救済の聖母 (Notre-Dame de la Délivrance)」を取り上げてみたい (地図4参照)。

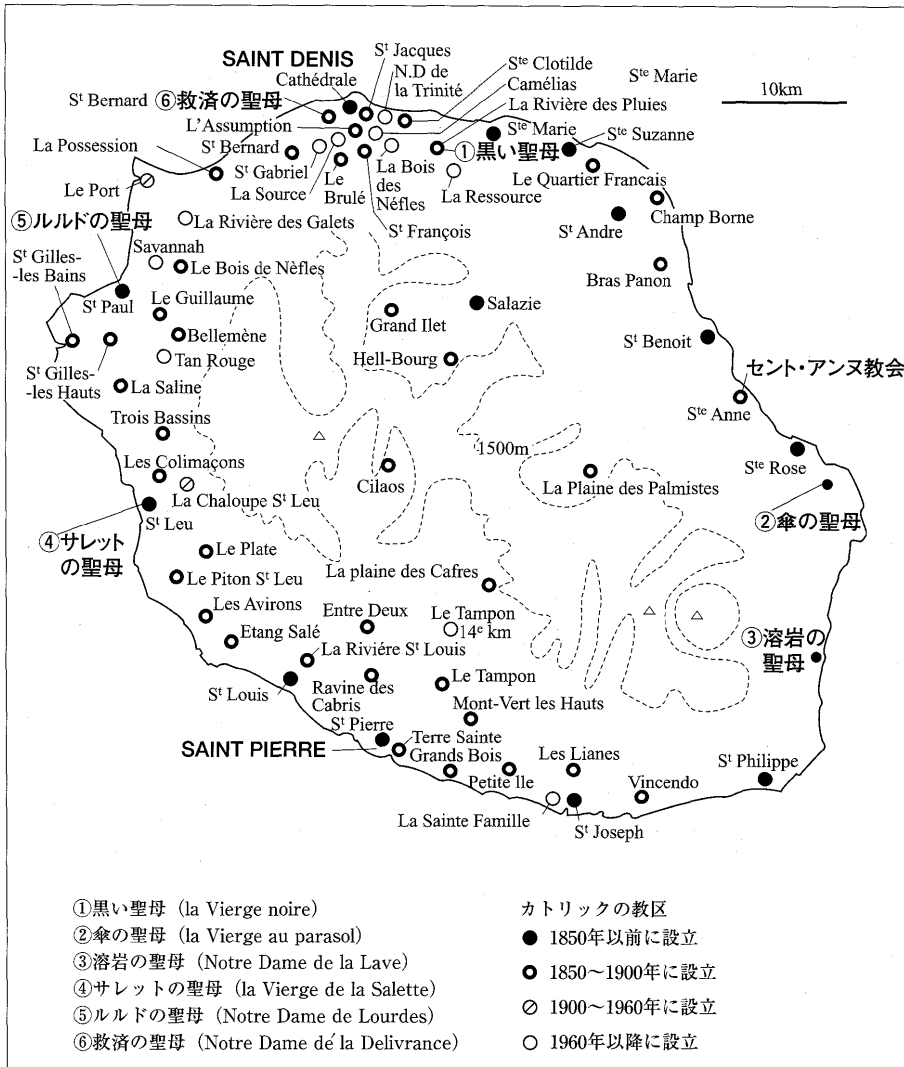
4.1 「黒い聖母」

レユニオンの聖母伝承のなかでもサント・マリーの「黒い聖母」とそれにまつわる奴隷少年マリオの物語は、島の人びとに深く愛されている。サント・マリーの聖ザビエル教会の岩壁に立つ「黒い聖母」像の足下には、いつもたくさんの蠟燭と花が手向けられている。岩には子供の健康や病気の治癒を願って奉納された衣服が置かれている。岩壁に上る階段の登り口には花屋が何軒も並び、聖母に捧げる花束を売っている。

今も語り伝えられている「黒い聖母」の伝承は、以下のようなものである。

昔、サント・マリーの金持ちの奴隷に、マリオという黒人少年がいた。少年は、よく怒った主人に叩かれていた。ある日、彼は森に逃げこんだ。森で「自由」という何にも代え難いものを手に入れた彼はとても幸せだった。プランターは報奨金までかけて逃亡奴隷を捜したが、誰一人マリオを見つけることはできなかった。それから3年の月日がたった。

ある晩のこと、猟師たちが岩山の向こうに一筋の煙が空にのぼっているのに気がついた。



地図4 レユニオン信仰地図

Pruhomme (1984: 8) の「カトリック教区」地図に聖母マリアの聖地を付加

近づいてみると、煮立った鍋がのった焚き火の前に黒人の少年がうずくまっていた。猟師の一人がこの少年を知っていた。猟師たちは彼を取り囲んでつかまえようとしたが、足音を聞きつけたマリオは、岩の間に飛び込んで姿を消した。猟師たちは戻ってこのことを主人に伝えた。山狩りが行われることになった。

マリオは敬虔な信仰をもつ少年だった。隠れ家の洞窟のくぼみに、彼と同じように真っ黒な黒檀でできた小さな聖母像をおき、毎日心を込めて花を捧げていた。幼い頃、主人にひどい目に遭わされている少年をみて哀れに思った優しい白人が、彼に洗礼を受けさせ祈りを教え、この小さな聖母像をくれたのだった。マリオはいつも聖母に祈りをささげ、辛い思いを

語り、慰めをえていた。彼には聖母が微笑みかけてくれるような気がした。

その夜、マリオはあまりの静寂に不安を覚えて起き上がった。時すでに遅く、隠れ家は包囲され、追っ手は勝利の叫びをあげた。驚いた少年は、マリア像に跪いて祈った。「ああ、貧しき黒人たちの母よ、私をお救い下さい、私をお守り下さい」。獵師たちは洞窟に近づいた。すると突然、洞窟の上の断崖からブーゲンビリアの枝がのび、洞窟の入り口は緋色や紫がかった花の咲く茂みであつという間に覆われてしまった。どんだんと伸びて茂る茨の蔓に、獵師たちの斧も剣も何の役に立たなかった。獵師たちが怒りに駆られて斧を打ち込んだり剣で切り払ったりするたびに、枝はさらに絡まりあい色とりどりの花が次々と咲いていった。マリオは、ブーゲンビリアの枝のうしろで小さな「黒い聖母」に感謝の言葉をささげ、泣きながら笑っていた。

それから何年もたったある日、堆積した岩や土の下で古い「マロン（黒人奴隷）」の頭蓋骨が発見された。乾いた遺体の下で、小さな黒檀の聖母像が微笑んでいた。敬虔な信者たちは崩れた岩穴を作り直し、花咲き続ける奇跡のブーゲンビリアを守った。その後、小さなマリオの聖母像は、今日、巡礼者たちが拜んでいる大きな黒い聖母マリア像に置き換えられた（Église Saint François Xavier n.d.: 4-5）。

この奴隷少年マリオの伝承は、プランテーションの過酷な労働に対する黒人奴隷の抵抗の物語であるとともに、キリスト教の聖母信仰の特徴が色濃く現れている。ブーゲンビリアが「すっぽり包む」ことによって少年を追っ手から守るというモチーフは、エジプトへの逃避行で追っ手に追われたマリアがみるみる成長した小麦の黄金の穂に隠れて難を逃れた物語や、受胎告知を受けたマリアが従姉のエリザベスを訪ねたとき白樺の枝がのびて彼女をにわか雨から覆い隠したという聖母の物語を想起させる（中丸 1999: 156）。聖母のイコンは、しばしば大きく広げたマントのなかに人びとを包み込んで悪魔の手から守る母というイメージで描かれた（竹下 1998: 105）。ブーゲンビリアの花や茨の蔓は、マリアを象徴する薔薇や茨の蔓のレユニオン版といえそうである。黒いマリア像も、フランスのマリア信仰ではなじみ深いものである⁴⁾。ここではそれが、黒人奴隷を白人プランターの横暴から守る「貧しき黒人たちの母」として語られている。

一方、教会は、サント・マリーの「黒い聖母」像について、次のような歴史を伝えている。レユニオン最初の司教であるデスプレ司教は、1854年12月8日、ローマで無垢受胎教理宣言に臨席して、1855年4月27日に島に戻った。司教は島中の主任司祭に、無垢受胎のマリアの祝聖儀礼をするために5月のある一日を選ぶようにいった。リヴィエール・デ・プリュイの主任司祭であったジェローム（Jerome）神父は、この祝聖儀礼のために5月1日の聖霊降臨祭の日を選んだ。聖マリア修道会の修道女たちは、この日のために修道会の大きな聖母像を貸し出した。教区の人びとは、教会横の岩壁にその聖母像を安置するために穴を掘った。この祝聖儀礼の後、教区の人びとは教会のためにマリア像を購入することに決めた。当時は航海のあいだによく荷が壊れた。そこでまった

く同じマリア像が二つ注文され、別々に梱包されて送られた。二つの荷は、どちらも無事に島に着いた。1856年5月1日、一つのマリア像は岩壁に、もう一つのマリア像は教会広場に据えられた。二つの像はどちらも鋳鉄でできており、灰色であった。鋳鉄は古くなると黒くなってしまう。そこで人びとは、岸壁のマリア像をくすんだ栗色に塗り、教会広場のマリア像を白く塗った。やがて「黒い聖母」はとても有名になった。「白い聖母」は、ほとんど顧みられないままである (Église Saint François Xavier n.d.: 4-5)。

先に述べたように、レユニオンの奴隷制が廃止されたのは1848年のことである。毎年5月1日には、「黒い聖母」の下に多くの巡礼者が集まり、盛大なミサが営まれる。1996年には、黒い聖母が祀られて140年の記念ミサが行われた。この年はちょうど最初のレユニオン出身司教となったオブリー司教の在任20年祝いにもあたったこともあって、司教がおこなうミサに全島から二千人あまりの信者が集まった (JIR 30/04/1996)。サント・マリー教会には、毎年5月1日と12月20日にたくさんの巡礼者が集まる。12月20日は、奴隷解放運動と解放奴隷の福祉のために生涯を捧げて1867年に他界した修道士スクビリオン (Scubilion) が、サント・マリー教会に埋葬された日である (Quotidien 21/12/1998)。

少年奴隷マリオの物語が伝える厳しいプランテーション労働と理不尽な白人植民者の仕打ちは、「黒い聖母」を自分たちの守護聖人として信仰した黒人奴隷とその子孫たちのみならず、奴隷に代わる労働力として島に連れてこられたインド人契約労働者やその子孫たちにも共感できる物語であったのだろう。「黒い聖母」に詣でる人々のなかには、インド系の人々も多く含まれる。奴隷制廃止後まもなく岩壁に安置された「黒い聖母」像は、少年奴隷マリオの物語や、奴隷のために生涯を捧げたフレール・スクビリオンの物語と結びついて、過酷な奴隷制時代の記憶を共有する人々の心に深く信仰されているのである。

4.2 「傘の聖母」

毎年、聖母昇天節の8月15日には、サント・ローズ (Ste. Rose) のル・グラン・ブリュレ (le Grand Brule) と呼ばれる溶岩大地にある「傘の聖母」に巡礼が集まって、盛大なミサが行われる。「傘の聖母」像は、19世紀の終わりにボワ・ブラン (Bois Blanc) のプランター、ムッシュウ・ルルウ (Monsieur Leroux) が栽培していたバナナ豆を火山の被害から守るために建立した聖母像が始まりである。レユニオンでは、活火山の活動が盛んである。「傘の聖母」は、いつしか多くの信者を集めるようになっていった。

1961年、幹線道路脇の岩の上に、青いパラソルをさしかけられ白と青の衣をまとった聖母像が立てられた。ピトン・ドゥ・ラ・フルネイズが活発な火山活動をした1998年の

聖母昇天節には、全島から約7千人の巡礼者が集まった (*Quotidien* 16/08/1998)。「傘の聖母」像の後ろには、奉納されたプレートが片づけられて山になっている。そこにはコルセットや松葉杖も放り出されている。聖母へ病氣や怪我の治癒を祈願し、回復後にお礼詣りに来た人々が、感謝の気持ちを込めて奉納したものである。また、「傘の聖母」の向かいには、サン・エクスペディの赤い小さな祠がある。

「傘の聖母」は幹線道路わきという地の利に恵まれていることもあって、祭礼の日に限らず、土日の休日などに多く信者が訪れる。信者たちは聖母に花を捧げたり、祈願のプレートを奉納して祈りを捧げ、聖歌を歌う。近年、付近の農民たちが「傘の聖母」の向かいの空き地に、野菜や焼き菓子の露店を出し始めた。店の数は年々増え、町も巡礼の経済効果が無視できない状況になりつつある (*Quotidien* 16/08/2000)。

「傘の聖母」は、火山というレユニオンにおける自然の脅威を背景に誕生した聖母信仰である。レユニオンにはもう一つ火山と結びついた聖母の聖地がある。ピトン・サント・ローズの「溶岩の聖母 (*Notre-Dame de la Lave*)」である。この教会は、1977年の火山の大爆発で流れ出した溶岩が教会の戸口で止まり、村に一人の犠牲者もでなかったという聖母の奇跡を伝えている (Barat ed. 1980: 129-130)。今も教会の入り口は溶岩に埋もれ、火山の恐ろしさを目の当たりにすることができ、観光名所の一つとなっている。

4.3 「サレットの聖母」

1996年9月19日にサン・ルウの教会で、フランスのサレット (*Salette*) に聖母が御出現して150年後の記念ミサが盛大に行われた (*JIR* 20/09/1996)。それは、後にサン・ルウの教会の司祭となるルイ・サイザック (*Louis Sayssac*) 神父が叙階した日のことであった。

1846年9月19日、フランスのサレット山で、二人の少年少女、メラニーとマクシマンの前に聖母が現れた。聖母は涙をこぼして、人びとに信仰の大切さを訴えた。1859年3月、インドから契約労働者の一行を運んできたマスカレーニュ号が、サン・ドゥニにコレラをもたらした。コレラは瞬く間に大流行し、島の人々を恐怖に陥れた。連日多くの犠牲者がでた。サン・ルウ教区のサイザック神父と教区の信者たちは、「サレットの聖母」に伝染病の沈静を祈願した。するとコレラの流行はおさまリ、サン・ルウの町には一人の犠牲者もでなかった。サイザック神父はマリアの加護に感謝し、サン・ルウの教会の裏の丘に「サレットの聖母」のチャペルを建立した。以来、サン・ルウは聖母の聖地となり、人々の信仰を集めるようになった。

1899年10月14日、足が麻痺した11才の少年がサン・ルウの聖母のチャペルに巡礼にきた。少年の母が聖母の台座に使われた小さな石の上の土を少し手に取り、少年の足にこ

すりつけた。すると少年の足は治り、何の支えもなしに一人で歩くことができるようになったのである。その後も、ここで治癒の奇跡が何度も起きたという (de la Rhodiere 1991: 26-30)。

毎年、聖母の御出現があった9月19日前後の2週間は、サレットの祭りと呼ばれる。祭りの期間中、サン・ルウの町に向かう道は、連日、巡礼者の車やバスで渋滞の長い列ができる。2000年9月19日も、例年どおりサン・ルウの教会に島内各地から約一万人の信者が集まった。早朝6時、オブリー司教と15人の司祭が列席して、「サレットの聖母」の顕現を記念して荘厳なミサが営まれた。「サレットの聖母」のチャペルがある丘は、このミサのために夜を徹して徒歩で巡礼してきた人びとや、前日から泊まり込んでいた巡礼者で埋まった (JIR 20/09/2000)。丘の麓には、飲食店や食料品、薬草、衣類、レユニオン特産の焼き菓子などを売る店の大きな市がたち、遊具が持ち込まれて移動遊園地がつくられる。丘に登る階段に続く沿道には、聖母マリアやキリストの写真やブックレット、ロザリオを売る店、聖母に捧げる花束を売る花屋が並ぶ。丘の階段を上るといくつもの十字架が並び、麓の喧噪とは別世界の祈りの空間が広がる。巡礼者は十字架の一つ一つに花束を捧げ、立ち止まって聖句を唱え聖歌をうたいながら、ゆっくりと丘を登ってゆく。丘の中腹にある「嘆きの聖母」像には白い子供服がたくさん奉納され、信者たちが捧げた蠟燭の炎が揺れている。丘の上に「サレットの聖母」のチャペルがある。チャペルのなかには、アルプス山中のサレットで聖母が子供たちの前に顕現した時の情景が再現されている。人びとは聖母像に蠟燭と花を奉納し、祈りを捧げる。祭壇の横に、聖母とサン・エクスペディの像が並んでいる。建物の外には聖水の湧く水路が流れている。人びとは競って聖水をくみ、その場で飲んだり水筒に詰めたりする。

4.4 「救済の聖母」

1857年10月、レユニオンに向かった船は喜望峰沖で大きな台風にあい、遭難しそうになった。乗船していたモボワン (Maupoint) 司教は聖母に祈念し、もしも船を台風から救い出してくれるならば「救済の聖母」という名の教会を建立することを約束した。祈りが通じて船は台風から脱し、その年の12月、無事にレユニオンの港に着いた (Association “Réunion Media” 1997: 3)。

翌1858年、サン・ドゥニの町を見下ろす丘に政府から教会建立のために土地が譲渡された。1860年、「救済の聖母」教会が建立された。1893年8月15日 (聖母昇天の日)、第4代司教ファブル (Fabre) 司祭と教区司祭バーソミュウ (Berthomieu) 神父の指揮の下で、大規模な新教会建設工事が始まった。1895年8月19日から20日にかけての夜、何者かにより教会へ上る2つの階段を見下ろす踊り場に置かれていた聖母マリア像の一部が壊され、花と蠟燭が遠くに投げ捨てられた。その3日後、サン・ドゥニの町に

不審火による大火事がおこった。人びとはマリア像への冒瀆行為と、この火事を結び付けて考えた。聖母に対する贖罪の儀礼がおこなわれた。1897年、蒸気船ペロー号によってリヨンの工房に発注されていた聖ヤコブと聖アンナ、そして12使徒をはじめとする29の彫像が到着し、教会のファサードに据えられた。リオ・グランデ号で運ばれた3メートルの聖母マリア像は、9月24日救済の聖母の日に教会の屋根の上に置かれた。1898年4月、新しい教会の落成式が盛大に祝われた (Association “Réunion Media” 1997: 13-21)。

サン・ドゥニの「救済の聖母」教会は、美しい壁画やステンドグラスが並んでいる。その一面が鉄柵で囲われ、その前に何本もの蠟燭が灯されている。鉄柵は、奉納された真っ赤な花で覆われ、なかには赤いマントを翻した聖人サン・エクスペディの像が安置されている。像の下には人びとが祈願の成就に感謝して捧げた白い陶器製のプレートがたくさん並んでいる。1931年、フランス本国にいたサン・ドゥニ生まれのシャテル婦人 (Madame Chatel) がレユニオン島に帰ろうとした。しかし、彼女の出航許可は下りず、半年待つようにいわれた。シャテル婦人がマルセイユの教会でサン・エクスペディに祈願したところ、3日後に願いがかなってレユニオン行きの切符を手に入れることができた。島に戻った婦人は、サン・ドゥニの「救済の聖母」教会の司祭に、聖人サン・エクスペディの像を奉納する許しを得た (JIR 11/10/1992, 18/02/1995)。後述するように、バチカンがサン・エクスペディへの信仰を迷信として教会から排除することを決めたが、その後もこの教会にサン・エクスペディ像は祀られつづけ、人びとの信仰を集めている。

このようにレユニオンの聖母マリアの聖地は、プランテーションでの過酷な労働、伝染病の脅威、台風の猛威や火山の噴火など、島の自然災害やそこにおける生活の苦勞と深く結びついている。聖母には病氣や障害から人びとを守るだけではなく、それらを治癒する奇跡をおこす力があると信じられている。また、聖母は人々の信仰心のなさを嘆き、冒瀆に怒り、また人びとの苦難とともに涙するような存在として捉えられている。

聖母の聖地には、とくに多くの信者が集まる巡礼日がある。サント・マリーの「黒い聖母」は5月1日と12月20日、サント・ローズの「傘の聖母」は8月15日、サン・ルウの「サレットの聖母」は9月19日である。こうした聖母の聖地への巡礼は、島の人びとの生活のリズムを織りなす年中行事となっている。また、1998年にサン・ボールの司教館に移された「ルルドの岩窟の聖母」が新たな巡礼地となったように、レユニオンの聖母信仰はつねに進行形なのである。

5 路傍の聖母祠とサン・エクスペディ信仰

レユニオンの人びとは教会や巡礼地の聖母像に詣でるだけではなく、道端に小さな祠

をつくって聖母像を祀っている。そうした路傍のチャペルの聖母像やキリスト像の足下に、しばしば聖人や高名な神父の絵や像が置かれている。聖人サン・クリストフは自動車事故から人びとを守り、サン・ジョルジュはサソリから守る。サン・アントニーは失せものの探しの力があり、サン・ミッシェルは危険から守る。サン・ベニヨワは妖術からの守る力があると信じられている (Barat ed. 1980: 130)。路傍の聖母は、こうした聖人たちを隨身のように従えて立っている。なかでも聖母のチャペルにもっとも数多く祀られ、またそれとは独立して独自の祠が設けられているのが、赤いマントを翻しカラスを足で踏みつけた姿の聖人サン・エクスペディである。

サン・エクスペディはローマあるいはアルメニアの武将で、303年の4月19日に殉教したと伝えられる。サン・エクスペディ信仰は5世紀にまで遡ることができ、殉教地のアルメリアから南ドイツ、イタリアのとりわけシシリー島、スペイン、南仏のポーからルルドへと広がって聖母信仰と結びつき、さらにパリからフランス全土へ、そしてベルギーに至ったといわれる。フランスでは特に1870年代から1880年代にかけてこの聖人への信仰が盛んになった。しかし1899年ごろ、ドゥルアイエ神父がサン・エクスペディの伝承が聖徒伝作家たちの作り話であると論じたことから、このローマの武将を聖人と認めるかをめぐって論争が起きた。1905年に法王ピウス10世は、サン・エクスペディを殉教者名簿から抹消し、各地の教会に祀られていた聖人像を撤去させた。しかし、パリ、ルルド、リヨン、マルセイユ、トゥールーズには、今もサン・エクスペディ信仰が残っている。

レユニオンにサン・エクスペディ信仰が入ったのは、第一次大戦後の1920年代といわれる。しかしこの聖人への信仰が活発になったのは、1931年にサン・ドゥニの「救いの聖母」教会にサン・エクスペディ像が祀られてからである。レユニオンのカトリック教会は、島民のサン・エクスペディ信仰に対して寛容な態度をとってきた。「救済の聖母」教会のほかにも、サン・ルウの教会、エタン・サン・ルウのチャペル、リヴィエール・ドゥ・マの聖母教会、サラジイの聖母教会という5つの教会やチャペルにサン・エクスペディが祀られている (Barat ed. 1980: 134)。

レユニオンでは1935年から1965年のあいだに、聖母マリアとともに祠に祀られていたキリスト教の聖人たちはヒンドゥー教の神々と同一視されるようになっていったといわれる。そこにおいてサン・エクスペディは、いつしかインド移民が島に持ち込んだヒンドゥー教のカーリー (Kali) 女神⁵⁾と同一視されるようになった。1965年、第二回パチカン公会議は、教会がこのような迷信から距離をおくことを改めて確認した (Martin 1997: 5-13; Callandre 1999: 368)。一方、ヒンドゥー教の司祭もまた、サン・エクスペディは妖術師の信仰対象であり、ヒンドゥー教の神ではないと非難している (JIR 11/10/1992, 18/02/1995)。このように今日、サン・エクスペディへの信仰は教会からも

ヒンドゥー教の寺院司祭からも迷信として排除されている。しかし、それでも今なお多くの人びとがサン・エクスペディに日常生活におこるさまざまな問題の解決を祈願しているのである。聖人の命日である4月19日はサン・エクスペディの祭日として知られている。

1997年の調査では、全島で337のサン・エクスペディ祠が確認されている。そうした路傍のサン・エクスペディ祠の61%が赤、14%が白、12%が赤と白、4%が赤と青に塗られていた。また、祠の52%には赤い布が、6%には白い布が奉納されていた。さらにサン・エクスペディ祠の30%に聖母マリア像が、15%に聖ミカエル像が、7%にキリスト像が、14%にキリスト受難像が併置されていた。また祠の中にはしばしばキリスト像やマリア像と並んで、ムルガン神の絵などが置かれていることもある。キャムバイのサン・エクスペディ祠にはライムを刺した三つ又の矛がある。この矛はシヴァ神を象徴するものである。そのサン・エクスペディ像の前には三つのリングが並んでいる(Martin 1997: 17-19)。

古くはカイエ神父が1867年に著した本のなかで、サン・エクスペディには紛争の仲裁者としての能力があると述べられているが、レユニオンでは若者の守護者と考えられている。学生の試験の成功を助けたり、Expédit (迅速) というその名前が示すとおりすみやかにデリケートな恋愛問題を解決したり、争いの仲介をしてくれる。また、罪人を改心させたり、病気を癒す力もあるとされる (Marie-Expédit 1997: 5, 18-19)。さらに、サン・エクスペディには「守護者」であるとともに「復讐者」としての側面もあると考えられている。カーリー女神もまた「守護者」でありかつ「復讐者」である。また、サン・エクスペディ像がカラスを足で踏みつけているように、カーリー女神もしばしば死体を足で踏みつけた姿で表されている。サン・エクスペディのマントの赤い色は、ヒンドゥー教では生命力を表すと考えられており、カーリー女神はしばしば赤色で表される。またサン・エクスペディは、戦士であり審判者であり守護者であるとともに使命のためには妥協しないヒンドゥー教の神マルデヴィラン (Mardeirin)⁶⁾ と同一視されることもある。実際、この聖人はしばしばカーリー女神やマルデヴィラン神の姿をとって現れるといわれる。なお、サン・エクスペディとともに聖母マリアの祠にしばしば奉納されている聖ミカエルは、槍で龍を退治する姿をとっている。この聖ミカエルは、槍で悪鬼を刺して勝利したと伝えられるムルガ (Mourouga) 神⁷⁾ のイメージと重ねあわされている。

レユニオンではほとんどの病気は超自然的な現象の介入、とくに隣人の悪意によって引き起こされると考えられており、人びとは病気をもたらした人物を罰して病気を治してくれるよう聖人に祈る。民間治療者はしばしば家の脇に小さな赤い屋根の祠をつくり、そこにサン・エクスペディを祀っている。先に述べたようにサン・エクスペディは

カーリー神と同一視されているため、カーリー女神に参拝する曜日である水曜日と金曜日に祈願すると効果があると考えられている。祈願者はライムやバナナなどの果物を祭壇にささげ、聖人の像の前で線香をまわす (Callandre 1999: 368-369)。ただし願いが成就したときには、必ずお礼参りをしなくてはならない。それを怠ると聖人は容赦ない罰をあたえるといわれる。また、自殺や殺人、交通事故などで命を落とした人の彷徨える魂をなぐさめるために、家族がサン・エクスペディの祠を奉納することもある (*Témoignages* 29/01/1987; *JIR* 11/10/1992)。

このようにレユニオンのサン・エクスペディ信仰には、キリスト教とヒンドゥー教が融合している。その背景には、レユニオンのインド系住民の生活がある。レユニオンのインド系住民の多くはカトリック教徒であり、教会のミサに通いながら、家庭で先祖から伝わる儀礼をおこない、ヒンドゥー寺院でパンディアレ⁸⁾、カーリー、マーリヤンマン⁹⁾といったヒンドゥー教の女神への祭礼をおこなっている。パブリックにはクリスチャン、プライベートにはヒンドゥー教徒といわれるゆえんである。

レユニオンのインド系住民は、本国との関係を絶たれて久しい。いつしかカースト・ヒエラルキーは忘却され、クレオール社会に同化して、生活様式や宗教も本国のそれとは異なる様相を示すようになった。ヒンドゥー寺院の儀礼暦は、砂糖生産に基づくレユニオンの農業暦やキリスト教の儀礼暦と融合した。南インドでは米の収穫期にあわせて1月半ば頃に行われるボンガル祭は、レユニオンでは1月1日の新年祭として祝われるようになった。パンディアレ、カーリー、マーリヤンマンといったヒンドゥー教の女神の寺院でおこなわれる火渡り儀礼は、多くの寺院で5月に集中しておこなわれる。5月はキリスト教の聖母マリアの月である。クリシュナ神の誕生日を祝うクリシュナ・ジャヤンティは、クリスマスに教会でキリストの生誕を祝ったあと自宅で祝われる。レユニオンのインド移民にとって、ヒンドゥー教の女神と聖母マリア、クリシュナ神とキリストのイメージはほぼ重なりあっていったようである。またレユニオンでは、死者はキリスト教の儀式をもって土葬されるが、墓地には十字架と共にオームという聖なる言葉をあらわすタミル文字や、シヴァ神を象徴する三つ又の矛が立てられることがある。オームという文字は生前女神寺院で火渡り儀礼をした人の墓に、三つ又の矛は生前ムルガン神の祭りでカヴァディ¹⁰⁾という苦行をした人の墓に立てられるという (Barat ed. 1980: 78)。

一方、路傍のマリアのチャペルには、しばしば奴隷解放に尽力したことによって人びとに慕われたラフォス神父やラヴァル神父¹¹⁾の写真も飾られている。ラフォス神父をはじめモレ神父、スクビリオン修道士など、生前貧しい人びとのために尽くし人びとに慕われた聖職者の墓にも、島民はさまざまな祈願をする。こうした霊力を持つ死者への信仰はさらに聖職者以外の有名な伝承にまつわる死者たちにも拡大されている。なかで

ももっとも霊的な力が強い死者として信仰を集めているのは、盗賊シタラン (Sitarane) の墓である (Barat ed. 1980: 131-133)。教会は死者の墓に願掛けをする信仰をアフリカ系クレオールがもちこんだ迷信としてことあるごとに非難してきた。

レユニオンのクレオール社会の日常的な信仰世界において、聖人たちは聖母マリアへの信仰と結びつきながら、その位置を確保している。レユニオンの聖母マリアは典礼に基づいた教会のキリスト教信仰と、庶民の日常生活における実践的な聖人信仰とを媒介しているのである。さらに聖母マリアの従者の位置に置かれた聖人の一人であるサン・エクスペディは、インド移民がもたらしたヒンドゥー教の女神信仰をレユニオンの人びとの信仰世界に包摂する媒介者となっている。同じように、聖母マリアの従者の位置に置かれた神父や修道士たちは、アフリカから連れてこられた奴隷たちの死者信仰をレユニオンの人びとの信仰世界に包摂する媒介者となっている。レユニオンのクレオール社会の信仰世界は、キリスト教を基盤としながら、聖母マリアへの信仰の傘下にさまざまな土地から移住してきた人々のもたらした信仰世界を統合することによってつくりあげられているのである。

6 クレオールの文化としての聖母信仰

フランスの入植まで無人島であったレユニオンには、フランス人プランターを頂点としアフリカ奴隷やインド人契約労働者を底辺とするプランテーションがつくられた。レユニオンのプランテーションにおいてクレオール語がつくられるのと、キリスト教が島民共通の信仰となるのは同時平行的に進行した。そこにおいて聖母マリアもまた、ヨーロッパの文脈をはなれてレユニオンにおけるクレオール社会の信仰世界のうちに位置づけなおされた。

そもそも聖母マリアは、聖書上初期の神学において重視されておらず、また父と子と聖霊の三位一体という神聖不可侵の領域の枠外にあった。しかし、それゆえに民衆は先行する土着信仰の女神のイメージに合わせて自分たちの信仰を自在に形づくることができ、またそうした民衆の信仰を通してキリスト教は大地母神の異教的エネルギーを吸収することができたといわれる (竹下 1998: 47)。しかしキリスト教会が吸収しようとしながら、つねに吸収しきれずに溢れてしまう異教的エネルギーとは、非ヨーロッパ系の人びとの信仰や庶民の土着の信仰を「異教的なるもの」として否定し排除するキリスト教の公的な権力そのものによって必然的に生み出されるものである。レユニオンのキリスト教を考えるうえで重要なのはこの点である。

植民地統治期のレユニオンにおいてカトリック教会は宗教的のみならず政治的に大きな力をもっていた。ヒンドゥー教の神々への信仰やフォークロア化した聖人信仰は、し

ばしば迷信あるいは邪教として教会から激しく批判されながら、人びとの日常生活におけるさまざまな祈りを吸収してきた。異教の神々や聖人は「異端なるもの」として教会から排除され非難されるがゆえに異教的パワーをもち、それが典礼に基づくキリスト教信仰の枠に収まりきらない実践的な霊力を希求する人びとを惹きつけてきたと考えられよう。

アンティーユのクレオール文学¹²⁾の作家がフランス語で書くのは、同化や服従の現れであるどころか、主人の言語を盗みマロン（逃亡奴隷）化して主人には理解できないような抵抗の言語として鍛えることなのだという（三浦 2000: 90）。レユニオンの巡礼地「黒いマリア」にまつわる奴隷少年マリオの伝承は、アンティーユの作家がフランス語で書く文学と同じように、レユニオンの聖母信仰が被支配者の抵抗の信仰として鍛えられてきたことを物語る。それでは聖人サン・エクスペディをカーリー神と同一視してしまう人びとの信仰はどうだろう。

レユニオンへ向かう契約労働者を乗せた船が出港したカリカル港から少し南に下った所にあるヴェーランガンニ（Vēlāṅkaṇṇi）の町は、南インドでもっとも有名なキリスト教の聖地の一つである。ヴェーランガンニの教会は、ベンガル湾で激しい嵐にあったポルトガルの船を救うために聖母マリアが出現したという聖母の奇跡に感謝してつくられた。巨大な船を象っているといわれるヴェーランガンニの教会の祭礼には、毎年、キリスト教徒だけではなくヒンドゥー教徒も数多く参加する。南インドでは、ヒンドゥー教の女神も聖母マリアも、ひとしく母（アンマー、Ammā）の名で呼びかけられる。ヒンドゥー教の女神を祀る寺院もキリスト教の聖母を祀る教会も、タミル語ではアンマー寺院（コーヴィル、Kōvil）である。

確かにクリスチャンとヒンドゥーは異なった宗教として区別されている。しかし人びとは御利益さえあれば、有名なヒンドゥー教の寺院や聖地に巡礼するのとはほとんど同じ感覚でキリスト教の教会や聖地にも詣でる。流行病にかからぬよう村の女神マリーヤンマンに祈るように、聖母マリアに病氣治しを祈願するのである。レユニオンに来島した契約労働者には、この地方で徴募された者も多い（地図3参照）。レユニオンへの長い船旅を前にしたインド人契約労働者のなかに、実際、ヴェーランガンニの奇跡のマリアに航海の無事を祈って出港した人びとがいたとしても不思議ではない。確かに聖母マリアとヒンドゥー教の女神とのイメージの重層は、インド移民のレユニオン社会への適応の結果である。しかし、南インドからの移民にとってレユニオンの聖母マリアを自分たちの信仰対象とすることは、必ずしもプランテーションの権力関係のなかで強要されたキリスト教への従属関係、あるいは主人の信仰を盗んだ抵抗の信仰ではなく、南インドにおける女神信仰から繋がる素朴な女神の力への信仰であったかもしれない。

ところで、レユニオンの教会に聖母像を祀って巡礼者を受け入れ、聖母信仰の礎をつ

くったのはフランス人神父たちにほかならなかった。それを支えた民衆のなかには、多くのフランス人プランターやその子孫も含まれていた。レユニオン島に「黒い聖母」や「サレットのマリア」といった聖母の巡礼地が生まれた19世紀から20世紀にかけて、ヨーロッパでは各地でマリアが出現し奇跡がおこっていた¹³⁾。1830年にパリのバック通りのチャペルで、1846年にはアルプスのラ・サレットで、1858年ピレネー山麓のルルドで、マリアの「御出現」があった。さらに1866年にはチェコ・スロバキアのフィリップスドルフで、1871年にはフランスのマイエンヌに聖母が顕現した。レユニオンにおけるクレオール文化としての聖母マリアやその従者とされる聖人たちへの信仰は、マリア信仰が盛んであった時代にレユニオンに赴任した神父や植民者たちの日常生活における信仰を基盤にしている。

フランスからレユニオンへ向かう船が出港するマルセイユ港を見下ろす丘の上には、「守護の聖母大聖堂」がそびえている。この聖母は船旅を守護する力をもつとされ、聖堂の内部には航海の無事を感謝して船の模型がたくさん吊されている。そもそもマルセイユは、小アジアのフリギア（現在のトルコのあたり）の地母神キュベレが古代アジアを通して前6世紀に伝来した土地であり、地母神崇拜はそこからヨーロッパに広がり各地で独自の展開をみたといわれる（坂井 2000: 33-34）。レユニオンの聖母信仰は被支配者であり改宗者であった奴隷や契約労働者といったプランテーション労働者とその子孫にとってのみならず、支配者であったフランス人プランターとその子孫にとっても、その日常生活における語りの世界の信仰なのである。

カリブ海やインド洋の島々にプランテーションを開いた当時のフランスはまだ言語的統一にはほど遠く、いわゆるフランス語を話す人々はまだ少数であった。植民地に入植した人びとの多くは地方出身の方言話者であったため、クレオール語の特徴とされるもののなかにはブルターニュ方言などの特徴が残っているという（三浦 2000: 92）。レユニオンの聖母信仰もまた、フランスの地方信仰の記憶を基盤としていえると考えられる。

先に述べたように、19世紀中頃から20世紀初頭にかけて、サン・ドゥニ司教区の専任司祭にはボルドー大司教の僧正補が任命される慣わしであった。また、聖母の母、聖アンヌに捧げられたセント・アンヌ教会で毎年7月におこなわれる聖アンナの聖地詣で行事はブルターニュから渡来したといわれている。この日、セント・アンヌ教会から聖アンヌと聖母マリアの像の輿が担ぎ出される。人びとは輿の後ろに行列をつくって町を練り歩く（*Quotidien* 26/07/1999）。正統フランス語へと一元化する公用フランス語に対して、日常語であるクレオール語は多元的に構築され、それゆえ多元的に開かれている。それと同じ様に、聖母マリアは人びとの日常的な語りの世界のうちにさまざまな姿をとって出現し、さまざまな奇跡をおこして人びとを救う多元的な存在である。聖母マリアが本来持つこの多元性こそが、インド人契約労働者の日常的な語りの世界に伝わる

インドの女神への信仰との隠喩的な重層を可能にし、アフリカ系移民の日常的な語りの世界に伝わる聖なる死者信仰への換喩的な連続を可能にした。

レユニオンの聖母信仰は、マルセイユの「守護の聖母大聖堂」で祈りを捧げて出港し、インド洋を越えてきた人びとがもたらした西欧の聖母信仰と、東アフリカやマダガスカル港から船積みされてインド海を越えてきた奴隷たちが過酷なプランテーション労働のなかに見出した聖母信仰と、南インドの村の女神に祈りを捧げて出港しインド洋を越えてきた契約労働者がもたらした聖母信仰が出会ったところに育まれ、教会が「異教的なるもの」として否定し排除する方向に向かう実践的な信仰を、キリスト教の枠うちに回収する回路をつくりだしている。それは、植民地社会におけるさまざまな民族的起源をもつ人びとが「葛藤に満ちた連帯」を模索するなかで育まれた、まさにクレオールの信仰なのである。

グローバル化の進行のなかで、フランス政府は多文化政策を進めている。海外県であるレユニオンも植民地下に形成されたプランテーション社会としてのクレオール社会から多文化共生社会への変貌をせまられている。そこにおいて、今日、レユニオンの人々はさまざまな起源をもつ島民の多様な文化を保持しつつ、レユニオン社会としての統一性を確保するような新たなレユニオン文化の創造を模索している。さまざまな土地から移り住んだ人びとの信仰世界を多元的なままに包摂しつつこの地に育まれたクレオールの聖母マリアへの信仰は、植民地支配下のプランテーション社会におけるクレオール文化でもなく、また実体化された多文化の共生でもなく、むしろそうした多文化性を超克するようなクレオールとしてのレユニオン文化を紡ぎだすための可能性を開いているのではないだろうか。

付 記

小稿は、文部省科学研究費補助金基盤研究B(2)(1999～2000年度)「南アジア社会におけるキリスト教と社会文化的変容に関する研究」(研究代表者 杉本良男)による研究成果の一部である。

注

- 1) 住民の民族構成については、クレオール42.6%、ヨーロッパ系25.6%(母語フランス語21.6%、母語クレオール語4.0%)、インド系20.0%(母語クレオール語15%、母語タミル5%)という統計もある(引用)。島では長年に渡って混血が進んでおり、名字の継承などを通して認識される民族的出自と本人の人種的特徴は必ずしも対応していない。
- 2) 以下のレユニオンのキリスト教史については、PrudhommeとÉveの一連の研究を参考にま

とめる (Prudhomme 1984, 1986; Éve 1999)。

- 3) マリアの娘修道会については、Éve による詳細な報告がある (Éve 1999)。
- 4) 「黒い聖母」はフランスの中央高地を中心に多く見られる。フランスだけでも200体以上といわれ、ドリユイド教の名残といわれる巨石 (聖石) 崇拜など、キリスト教以前の土着の信仰との結びつきが論じられている (馬杉 1998: 81)。
- 5) カーリー女神は、ブランテーションのグラマデーヴァター (grāmadēvatā, 村神) として祀られている。強い霊的な力 (śakti, シャクティ) をもち、怒らせると恐ろしい神である。レユニオンではコレラから守護してくれる神とも考えられている (Callandre 1999: 293)。レユニオンのフォークロア化されたヒンドゥーイズムについては、バラ、ベニョワらの報告がある (Barat 1980, 1989; Benoist 1980, 1988)。
- 6) マルデヴィランは、マドゥライヴィーランの名で南インドの村で広く信仰されており、マドゥライ地方の伝説的な英雄が神格化された神である。
- 7) ムルガとはスプラマニアンとも呼ばれる。シヴァ神の息子で、南インドでもっとも人気のあるムルガン神のことである。
- 8) パンディアレ女神はドルヴェデ (Dolvédé) ともいわれる処女神であり、マハーバーラタに登場するドラウパティ (Draupati) のことである。
- 9) マーリヤンマンは南インドで最も広く信仰される村の女神である。疱瘡を引き起こす神と考えられている。
- 10) カヴァディとは、正確には肩に背負う大きな苦行具を意味する言葉であるが、苦行具を背負って行く儀礼をさすこともある。ムルガン神の信者は、祭礼の日はこの苦行具を背負ったり、ミルクの入った壺を頭上に乗せたり、針で皮膚や舌をさしたりした姿で、山車と共に長い道のりを行列して歩く。レユニオンには、1950年代にモーリシャスからカヴァディの行事が導入された。
- 11) ラヴァル神父はモーリシャスで奴隷解放のために力を尽くし、聖人として慕われている。ラヴァル神父の墓は聖地となり、命日の9月9日には多くの信者が巡礼する。ラヴァル神父がレユニオンに滞在したのは1845年に1月ほどであるが、9月9日にはブラ・ピストル (Bras-Pistolet) の教会で特別なミサがおこなわれる (*Quotidien* 10/09/1995)。
- 12) クレオール文学は、カリブ諸島などかつてのヨーロッパ植民地に生まれクレオールとしてのアイデンティティをもつ人びとが、フランス語やクレオール諸語で書くプロセスの全体性という運動をさすが、ここではシャモワゾーらがクレ奥ールの文学を論じることによって主張する調和ある多様性や、その豊かさのなかで響鳴しあう全体性、そして語り部の語りとの連続性という特徴に注目したい (シャモワゾー他 1995: 86-88, 289)。
- 13) ローマ教会が認知、公布したマリアの顕現だけでも10例以上ある。なかでも有名なものに1531年のメキシコのグアダルー、1858年のフランスのルルド、1917年のポルトガルのファティマなどがあり、いずれの聖地も巨大な巡礼地に発展している。近年では1933年のベルギーのバンヌーでの顕現が認知されている (中丸 1999: 183)。19世紀から20世紀にかけての聖母出現とその社会的背景については、竹下 (1994, 1996, 1998)、関 (1993) が詳しく論じている。

文 献

Association “Réunion Media”

- 1997 *Notre-Dame de la Délivrance 1997 : année du centenaire de son achèvement*. St-Denis: Notre-Dame de la Delivrance.

Barat, Cristien

- 1989 *Nargoulan: culture et rites malbar à La Reunion*. St-Denis: Édition du Tramail.

Barat, C.ed.

- 1980 *Rite et Croyance: l'Ame d'un peuple venant de partout s'enraciner dans une île volcanique et corallienne au coeur d'un archipel Créole*. Collection a la decouverte de la Reunion vol.8, St-Denis: Edition Favory.

Barrett, D.B., G.T.Kurian and T.M.Johnon

- 2001 *World Christian Encyclopedia: a Comparative Survey of Churches and Religions in the Modern World*. Oxford: Oxford University Press.

Benoist, Jean

- 1980 *Réligion hindoue et dynamique de la société Réunionnaise*. In *Annuaire des Pays de l'Océan Indien*, vol.VI, Aix-en-Provence: CNRS/PUAM.
1998 *Hindouismes Créoles Mascareignes Antilles*. Paris: Éditions du Comité des Travoux historiques et scientifiques.

ベルナベ, ジャン/パトリック・シャモワゾー/ラファエル・コンフィアン

- 1997 『クレオール礼賛』(恒川邦夫訳), 平凡社。(Jean Bernabe, Patrick Chamiseau and Raphael Confiant, *Éloge de la Créolite, Édition bilingue français/anglais*. Galimard, Paris, 1993.)

Callandre, Florence

- 1999 *Koilou: Représentation devine et architecture sacrée de l'hindouisme réunionnais*. St-Denis: Université de La Réunion.

シャモワゾー, パトリック/ラファエル・コンフィアン

- 1995 『クレオールとは何か』(西谷修訳), 平凡社。(Chamoiseau, Patrick and Raphael Confiant, *Lettre créoles: Tracées antillaises et continentals de la littérature 1635-1975*, in *Breves Littérature séries*, Hatier, Paris, 1991.)

Cherer, Andre

- 1998 *La Réunion, Que sais-je? 1846*, Press Universitaires de France.

de la Rhodiere, Vitor P.

- 1991 *La salette de St-Leu: un lieu où Marie aime etre priée*. Ste-Clotilde: Nouvelle Impimerie Dionysienne.

Dupon, Jean-Francois

- 1974 *Les immigrants indiens de la Réunion: Évolution et assimilation d'une population*. In *Chaiers du Centre Universitaire de la Réunion*, vol. 4: 67-93.

Église Saint François Xavier

- n.d. *Paroisse* (typescript).

Éve, Prosper

- 1999 *Du tourchis à la Pierre: la Congrégation des Filles de Marie*. St-André: Imprimerie

Graphica.

Institute National de la Statistique et Études Économiques (INSEE)

1998 *Tableau économique de la Réunion*. St-Denis: Chambre de Commerce et d'Industrie de la Réunion.

Leguen, Marcel

1989 *Histoire de l'île de la Réunion*. Paris: L'Harmattan.

Marie-Expédit, Frère

1997 *Saint Expédit*. Paris: Édition Tequi.

Martin, F.

1997 *P'ti Bon Dieu*. Museum Agricole et Industriel Stella Matutina.

馬杉宗夫

1998 『黒い聖母と悪魔の謎——キリスト教異形の図像学』(講談社現代新書 1411), 講談社。

中丸 明

1999 『聖母マリア伝承』, 文藝春秋社。

坂井 健

2000 『ゴシックとは何か——大聖堂の精神史』(講談社現代新書 1487), 講談社。

関 一敏

1993 『聖母の出現』, 日本エディタースクール出版。

Prudhomme, Claude

1984 *Histoire Religieuse de La Réunion*. Paris: Éditions Karthala.

1986 Les Indiens de La Réunion entre Hinduisme et Catholicisme. In *Les relations historique et culturelles entre la France et l'Inde, XVIe-XXe siècles*. Actes de la conférence internationale <France-Inde> organisée par l'Association historique internationale de l'Océan Indien, à St-Denis de La Réunion, du 21 au 28 juillet 1986. Tome 1.

三浦信孝

2000 「クレオール語の成立とその生き残りの条件」『ことばと社会——多言語社会研究』3: 81-105, 三元社。

竹下節子

1994 『バリのマリア——ヨーロッパは奇跡を愛する』, 筑摩書房。

1996 『奇跡の泉ルルドへ』, NTT 出版。

1998 『聖母マリア——〈異端〉から〈女王〉へ』(講談社選書メチエ 137), 講談社。

新 聞

Témoignages 29/01/1987 "Enquête: Voyage dans l'imagi".

JIR (le Journal de l'Île de la Réunion) 11/10/1992 "Expédit: un culte repandu mais mysterieux, Un saint pas comme les autres".

JIR 18/02/1995 "Il dérange les églises, il arrange les fidèles".

JIR 30/04/1996 "140e anniversaire des deux Vierge de la Riviere-de-Pluies: La Vierge noire de toutes les passions".

JIR 20/09/1996 "Pèlerinage de Notre-Dame de la Salette: Des milliers de fidèles pour le 150e anniversaire".

JIR 19/04/1999 “Mess du 150e anniversaire de l’Institut des filles de Marie à Riviere-des-Pluies:
La trace d’une foi exemplaire”.

JIR 20/09/2000 “10 000 fidèles pour le pèlerinage de Notre-Dame de la Salette: La mission de
Marie continue”.

Quotidien 10/09/1995 “Le père Laval vénéré de Maurice à la Réunion”.

Quotidien 12/02/1998 “Saint-Paul/Notre-Dame de Lourdes dans la cour de la cure: Un millier de
fidèles sur le nouveau lieu de pèlerinage”.

Quotidien 16/08/1998 “La messe est dite, tous au volcan”.

Quotidien 21/12/1998 “Sept mille pèlerins autour de frère Scubilion”.

Quotidien 22/03/1999 “150e Anniversaire de la Congrégation des filles de Marie: Aimer ceux que
le monde rejette”.

Quotidien 26/07/1999 “Grand pardon de Sainte-Anne: Rassemblement de 3 000 fidèles”.

Quotidien 16/08/2000 “Célébration de la messe de l’Assomption à Ste-Rose: Plusieurs milliers
de pèlerins à la Vierge au Parasol”.

